

論文

2019年8月27日、国連大学グローバル・セミナー、第35回湘南セッション

講演録「宗教とテロ・・・イスラーム理解の重要性」

アラブ調査室長・筑波大学名誉教授、博士（文学） 塩尻和子

1、国際社会の利害に翻弄されて

イスラーム地域に関して、歴史的に考えてみると、この地域の後進性や貧困、政治的混乱が問題視されるようになったのは、1922年のオスマン帝国の滅亡以降のことである。また特に中小の戦闘的集団による過激な攻撃や内紛が多発するようになったのは1948年のイスラエル共和国の成立に端を発し、2001年にアメリカで発生した同時多発テロと、それを契機として勃発した2003年からのアメリカを中心とした有志連合によるイラク戦争で拡大し過激化したものである。

これらの民族紛争や内紛の混乱や紛争の原因は、実際には国際社会の様々な覇権争いや、深刻な経済的格差などであるが、これらの問題を短絡的にイスラームの教義や戒律に責任を押し付けるような風潮が横行しているのは、残念なことである。中東地域は今日の国際社会のなかでむしろ犠牲者となっており、その怒りがテロ活動となって表面化することは忘れてはならない。

一般に主義主張とは無関係の人命が失われることが多いテロ事件は、世界中でどの宗教の信徒でも起こす可能性がある犯罪であり、イスラーム教徒だから起こすのだ、という短絡的な理解は、テロの解決には決してつながらない。

日本ではまだムスリム人口が少なく、日本に伝えられるイスラームに関する情報の多くは、欧米のメディアを通してもたらされるものであり、その中にはイスラームとイスラーム教徒、ムスリムに対する偏見や蔑視、無理解などを含んでいるものが少なくない。このような欧米からの情報によって増幅されたイスラームに対する偏見と嫌悪感「イスラームフォビア」は、今日の日本人にも大きな影響を与えている

イラク北部とシリアを中心に軍事的勢力を広げ、2014年6月にいわゆる「イスラーム国」を名乗るようになった戦闘的集団は、世界中から多くの若者を集めて勢力を伸ばし、シリア内戦に便乗して暴虐の限りを尽くしていたが、やがてイラク軍やシリアの民兵組織に追い詰められて、2019年3月にはシリア東部の最後の拠点バグーズも失うことになって、組織は壊滅したと報じられた。最近では、その本体の勢力は急速に衰えているが、しかし生き残った戦闘員たちが世界の各地に潜んで突発的なテロを起こす「ローンウルフ型テロ」の危険性が増している。

冷静に考えてみれば、「イスラーム国」のようなテロ集団は世界史の中では、どの時代にも様々な国や地域で、それぞれの宗教を背景にして出没している。今日の過激派が破壊

的なテロ集団になるのは、彼らがイスラーム教徒だからだという、巷間、喧伝される論理は正しくないが、イスラームの基本的な教義や法をも順守しない破壊的な集団のどこに若者を引き付ける魅力があるのか、その「なぜ」については検討する必要がある。世界中からこの集団を目指して入り込んでくる若者たちはイスラーム教徒ばかりではないからである。

「イスラーム国」は「国」と名乗ってはいても、国家としての体制を取っていない。特定の地域性を持たず、他のイスラーム諸国やイスラーム教徒の忠告を聞く耳を持たない。それだからこそ、国際社会の中東に対する政策が完全に転換されない限りは、イラクやシリアの拠点攻撃され奪取されても、「イスラーム国」は生き続ける可能性がある。

2、聖職者のいない宗教

日本でも「イスラーム国」を解説する書籍が多く出版されているが、中には「イスラームにはもともと戦闘的な性格があるので、『イスラーム国』の論理は正しい」と主張する著作もみられる。それらの主張はどのような意味を持つのか、イスラームの教義を紹介しながら考えてみたい。

イスラームという宗教には、ローマ教皇庁のような統率者組織がなく、教会のような会員制度も、仏教のような大本山制度も檀家制度もない。イスラーム社会の全体に関わる重要な問題については、それが聖典クルアーンとハディースに依拠していると認められれば、正しい見解だとされるが、それでは、いったい誰が正誤を判断する決定権をもっているのか。歴史的にみれば、それは預言者の後継者であるカリフであるが、正統的なカリフが存在しない現代では、実際にはウラマーと呼ばれるイスラーム法学者の見解の一致が一定の実効力をもっている。

ウラマーはイスラーム社会の指導者として、ある程度は聖職者の役割を果たすこともあるが、特に多数派のスナ派では、彼らの見解や発言には神聖性も特定の権威も認められない。ウラマーになるためにマドラサという高等教育機関で学ぶ人が多いものの、公的な資格試験などもなく、イスラーム法について特に博識で尊敬される人々が、信者によってウラマーだと認められるだけである。国家の裁判官や司法関係者のような公職についている人たちのほかは、多くの場合、別に生業をもち無給で法律相談に乗るのが一般的である。

ただし、イスラーム世界で 10%弱の人口を持つ少数派のシーア派では、ウラマーを養成する専門の法学校が整備されており、ウラマーの位階も整っていて、高位のウラマーは聖職者に近い扱いを受けることもある。

具体的な例を挙げれば、アメリカ軍によって暗殺されたウサーマ・イブン・ラーディン（ビン・ラディン）は、多数の信者が彼をウラマーだと認めてはいなかったが、自らウラマーであると称して、宗教法的な回答や見解（ファトワー）を発出していた。

言い換えれば、スナ派のイスラーム世界では特定の宗教組織を持たないが、その意思決定については信者の共同体ウンマのネットワークが決定権をもつ社会なのである。ウン

マはいわば理念的な宗教共同体であるが、国家や政治や経済の枠を超えて、信者たちの連帯意識を保つためには重要な基本的概念でもある。したがって、法学者たちの判断についてそれを受け入れるか否かは、信者個人個人、つまりウンマの意思決定に委ねられている。

現代の過激なイスラーム主義者やテロリストたちは、かれらの思想はクルアーンの教えに依拠していると主張する。しかも、彼らのその独自の解釈によって展開される過激な思想が、クルアーンとハディースに依拠していると主張される限りは、それを異端だとして排除する機関は、イスラーム社会には存在しない。多数派のムスリムにできることは、過激派の思想はクルアーンとハディースに依拠していないとして拒否することだけである。

3、ジハードの意味

ムスリムが主体となって起こすテロの要因に関する偏見のなかで、もっとも深刻なものは、イスラームの聖典クルアーンには「ジハード」に代表されるような戦闘的な教えが多く、そのために現代でもムスリムはテロや戦争を黙認するのだ、という言説がある。しかし、クルアーンの戦闘的な語句や暴力を推奨するような文言は、キリスト教の聖書と比較すると極めて少ない。たしかに、イスラーム法学の戦時規定には、厳しい文言がみられるが、イスラーム史の中では、それらの規定が宗教の名の下に実際に行われたという事例は少ない。それらの文言は、もともとクルアーンの啓示が下った際の状況を考慮して解釈されるべきである。

聖戦思想はイスラーム独自の思想であるかのように、言われることが多いが、歴史的に見ると、キリスト教の思想の中で発生したものである。中世のキリスト教では、戦争や政治から大きく距離を置いていた初期の教義と対立する「正義の戦争」の概念を展開した。その指標となったのはアウグスティヌス（354-430）である。キリスト教がローマ帝国の国教として採用（392年）されて以降、ローマ教皇も宣教の拡大のための有効な手段とみなして戦争を容認し、キリスト教世界には現代まで戦争が止むことはなかった。平和的な「十字軍」と戦闘的な「ジハード」という背反する概念が広まることになった。

そもそもジハードは本来、「努力」を意味する言葉であり、「奮闘努力」とも訳される。これには二つの意味があり、精神的宗教的な修行を意味する「精神的ジハード」と、対外的な郷土防衛戦争を指す「防衛的ジハード」に分けられる。外敵の侵略に対抗する防衛的ジハードが全ムスリムに課せられる個人的な義務でもあったということは、ジハードが一般に理解されているような「聖戦」ではなく、むしろ合法的な「正戦」であるということを示している。しかもこの正戦が発効するためには、以下の規定に従わなければならない。

- ①ムスリムの領土に外部から異教徒が侵攻してくる場合に限られること、
- ②カリフの指揮のもと、全ムスリムが一致して参戦すること
- ③一般市民や婦女子などの非戦闘員やキリスト教の修道士や僧侶、ユダヤ教のラビなどの宗教者に危害を加えないこと

ジハードは、ある意味ではムスリムに許された唯一の戦争ともいえるが、上記の3点の条件を満たすジハードは、歴史上、一度も実現していない。これらの規定を守るとなれば、実際に戦争の遂行が困難となる。したがって、ムハンマドの死後の歴史上、このような基準を満たした郷土防衛のジハードが実施されたことは、一度もない。そこで為政者たちは「カリフの命令がなくても、郷土が危険に曝されたなら」という簡便な判断を採用して、周辺国への侵略を正当化することになる。

ジハードは原則的にはムスリムに許された唯一の戦争というかたちをもつが、この「戦い」は、当初から定義づけが難しかったことも事実である。歴代の権力者による政治的覇権事業は、それぞれの歴史的状況によっては、ムスリム同士でも激しい戦闘が行われたが、これらは政治的覇権戦争であり、郷土防衛戦争を指す「ジハード」とは区別されてきた。

1099年の十字軍の襲来は、このジハードが宣言されるに最適の機会であったが、イスラーム諸国が分裂・競合しており、一致して対処できなかったため、第1回十字軍にやすやすとエルサレムを占領された。然し第2次十字軍以降最後の十字軍まで、すべてイスラーム側の勝利に終わっている。

4、現代のジハード論

私たちはイスラームのジハードという言葉を知るとき「平和的なキリスト教」にたいする「好戦的なイスラーム」という二項対立の構図を描きがちである。究極の愛の教えを掲げているキリスト教には、3世紀に現れた聖戦士セント・ジョージの伝説や5世紀のアウグスティヌスによる「正義の戦い（Just War）」という思想、それに基づく十字軍運動、さらには異端尋問や魔女裁判、南米やアフリカへの侵略と宣教などの戦闘的で残虐な歴史的事実があることを忘れがちである。

ある意味では、「聖戦思想」も「正義思想」も、ユダヤ教、キリスト教、イスラームに共通の思想であり、イスラームだけに突出したものではない。むしろユダヤ教に始まった「唯一なる神との契約」を思想的根拠としている戦いである。旧約聖書では神の意志に従って実施される戦争は、たとえそれが侵略戦争であっても「聖戦」とみなされている。ユダヤ教の聖戦思想は強固な選民思想に基づいており、約束の地を求めて戦闘が間断なく行なわれた。旧約聖書を紐解いてみると、神から選民以外の民を皆殺しにする戦闘を命じられて、戦いに明け暮れるイスラエルの民の姿が浮かんでくるが、この思想が今日のイスラエルの政策にも反映している。

それでは現代のイスラームのテロリストたちがどう考えているのか。たとえば「イスラーム国」でみられる戦闘的なジハードについての考え方は、外敵とは「異教徒」だけではなく、同じイスラーム教徒の枠の中で「本来のイスラームの教えから外れている」と彼らが判断した人々に対して向けられることになる。「もはや彼らはイスラーム教徒ではない、背教者である、宗教を裏切ったものである、だから敵である」として戦闘行為を行ったり、テロを繰り返したり、暗殺をしたりすることになる。

預言者ムハンマドが意図した、崇高な精神的な修養を意味するジハードという考え方が、今日では、同じイスラーム教徒同士が戦う名目になってしまうことは、大変悲しいことである。

あなたがたに戦いを挑む者があれば、神の道のために戦え。だが侵略的であってはならない。本当に神は侵略者を愛さない。(2章 190節)

イスラーム世界は、ごく最近に至るまで歴史の過程のほぼ全域で、このクルアーンの教えに従って、異教徒たちと平和裡の共存をなし遂げてきたという歴史的事実がある。イスラーム世界で多くの政治的、宗教的衝突や内紛や騒乱、覇権志向の戦争などが行なわれてきたことを無視するべきであるというつもりはない。しかし戦闘規模や死者数、虐殺行為などはキリスト教徒の戦争による死者数と比べても、極めて少なかったことは、欧米の多くの歴史学者たちも認めていることである。

オスマン帝国の滅亡以降、西洋列強によって植民地化され搾取と抑圧に苦しんでいた中東地域で、さらにパレスティナ問題が発生し、解決の糸口も見られない状況下であって、イラク戦争やシリア内戦など、一刻も止むことがない紛争の中で、女性や子供を中心に数百万人という一般の人々が亡くなるという残酷な状況が「イスラーム国」やアル・カーイダなどの戦闘的過激派集団を産んだのである。中東地域で過激派のテロ活動が、これほど大きな危険性を孕んできたのは、実はごく最近のことなのである。

5、「イスラーム国」の解決法を探る

現在、多くのイスラーム教徒は、「イスラーム国」の政策は、「イスラーム」の名を冠していても、クルアーンの教えとイスラーム法の規範から違反している上に、彼らの戦闘行為はイスラームという宗教とは無関係であると考えている。つまり、戦闘的イスラーム集団の動向は、イスラームという宗教を實踐しているのではなく、彼らの活動にとって都合よく解釈された思想にすぎず、宗教的教義から外れた経済的・政治的覇権競争を行っているのである。

日本でも「イスラーム国」や戦闘的集団の行為は「イスラームは本来的にテロや暴力を容認する」という教義をもとにしていると主張する学者もいて、その解釈は「わかりやすい」としてもはやされる傾向があるが、これには大きな危険が伴う。歴史的にみて、戦闘的集団はイスラーム教徒だけでなく、キリスト教徒（たとえば十字軍や植民地活動）にもユダヤ教徒（例えばパレスティナ人攻撃）にも、その他の宗教集団にもみられる。このような「イスラームは本来的にテロや暴力を容認する」という主張は、クルアーンの教えと照らし合わせて、決して適切な理解ではないばかりか、政治的・経済的な紛争を宗教対立に転嫁することによって、意図的に問題の解決を遠退けることになる。

とくに現在の紛争には、アフガニスタン空爆からイラク戦争にいたる国際政治や、石油

や天然資源にまつわる経済の力関係によって生じた宗派や民族の分断政策にこそ、大きな要因がある。分断された宗派や民族が、抵抗運動（つまりテロ）の大義名分としてジハードを掲げるからである。

もともと宗教的・精神的次元だけでなく、日常的、社会的、経済的な次元を含んだ総合的な宗教として展開してきたイスラームでは、理念的に宗教と政治を切り離すことはできない。「イスラーム国」のように、クルアーンの極端な解釈に基づいて文字通り戦争やテロ行為への命令として受け入れる集団が台頭してくることも否めない。しかも、イスラームだけでなく、どの宗教にも、多種多様な解釈が可能であり、偏った過激な解釈であっても、それだけで単純に排除することはできない。

昨今の「イスラーム国」の実態については、私達にはよく見えてこない面もあるが、「イスラーム国」が主張する「ヨーロッパ列強が、中東地域を土足で踏みにじるようにして占領した 1910 年代まで戻り、新たに中東地域の独立をイスラーム法に基づいて勝ち取ろう」という運動には、賛同する人々も少なくない。

そもそも「イスラーム国」が誕生した直接の要因は、パレスティナ紛争から始まり、アフガン空爆、イラク戦争、リビア空爆などの欧米による一方的な政治的軍事的介入である。それと軌を一にして起こったシリアの反体制運動と北アフリカの民衆蜂起なども、何ひとつ解決の道が見えない中で、混乱状態だけが生じてきたことへの、人々の不満と怨念が積もり積もったものである。国際的にみると、この 100 年間を経て、今日の資本主義体制の破綻と、驚異的な貧富の格差、若者に与えた将来への失望と不安感などにみられる近代性の破綻に、欧米諸国が真剣に取り組まなかったことにも行きつく。自己の信じる宗教が何であれ、社会に不満をもつ若者にとって、「イスラーム国」の存在は、彼らの不満のはけ口としては最も魅力的な場と映ったのであろう。

つまり、「イスラーム国」とそれに賛同する人々が起こす事件は、犯罪であって、決して「ジハード」ではない。ジハードは郷土防衛のために異教徒を対象とする戦闘であるが、「イスラーム国」は同じイスラーム教徒を殺害している点からも、宗教的な正当性は、ない。

一方で考えなければならないことは、人命を奪う行為としては、欧米の有志連合が行う戦闘行為も、「イスラーム国」が行う戦闘行為にも、良し悪しの区別はない、ということである。どちらも人命を奪う「テロ」行為なのである。「イスラーム国」やその支配地域だけではなく、内戦が止まないイラク・シリアやパレスティナでは、すでに数百万人に登る多くの市民が殺害されている。毎日のように空爆や地上戦によって、「イスラーム国」の戦闘員よりも一般市民の方が多く殺害されていることは、派手な宣伝合戦の背後に隠されて、報じられることがすくない。特にイスラーム教徒の一般市民の死は悼まれることもなく、彼らの悲劇は、いつも忘れられやすい。

テロ対策として安易に行使される軍事力は、一般人の間にも根深い憎悪を生み、さらにテロを継続させることになる。犠牲者が増えれば増えるほど、解決への道が遠くなるのは、70 年を経てもいまだに犠牲者が増え続けるパレスティナ問題で実証済みである。

「イスラーム理解と平和的共存」に関する参考資料（出版年順）
（日本語で読めるもの）

塩尻の著作（単著・共著など）

- ・ 共訳『聖戦の歴史』アームストロング著、塩尻・池田訳、柏書房、2001年
- ・ 共著『イスラームの生活を知る事典』塩尻・池田著、東京堂出版、2004年
- ・ 共訳『グローバルテロリズムとイスラーム』塩尻・杉山監訳、明石書店、2004年
- ・ 単著『イスラームを学ぼう—実りある宗教間対話のために—』秋山書店、2007年
- ・ 単著『イスラームの人間観・世界観』筑波大学出版会、2008年
- ・ 監修・共著『図解宗教史』塩尻・津城・吉水監修、成美堂出版、2008年
- ・ 単著『イスラームを学ぶ』（NHKカルチャーラジオ歴史再発見）NHK出版、2015年
- ・ 編著『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』塩尻編著、明石書店、2016年
- ・ 共著『宗教と対話』小原克博・勝又悦子編、教文館、2017年

その他の研究者の著書

- ・ 『地中海世界のイスラム』モンゴメリ・ワット著、筑摩書房、1984年
- ・ 『イスラーム誤認』板垣雄三著、岩波書店、2003年
- ・ 『イスラムと十字軍』（文明の道4）NHK出版、2004年
- ・ 『イスラーム化する世界』大川玲子著、平凡社、2013年
- ・ 『世界史の中のパレスチナ問題』臼杵陽、講談社現代新書、2013年
- ・ 『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか？』星川啓慈・石川明人著、並木書房、2014年
- ・ 『イスラームの深層』鎌田繁著、NHK出版、2015年
- ・ 『イスラーム 生と死と聖戦』中田考著、集英社新書、2015年
- ・ 『「イスラム国」はテロの元凶ではない』川上泰徳著、集英社新書、2016年
- ・ 『キリスト教と戦争』石川明人著、中公新書2360、2016年
- ・ 『シャルリとは誰か』エマニュエル・トッド著、堀茂樹訳、文春新書、2016年
- ・ 『シャルリ・エブド事件を読み解く』ケヴィン・バレット編著、板垣雄三監訳・解説、
第三書館、2017年
- ・ 『イスラーム主義』末近浩太著、岩波新書、2018年
- ・ 『9.11後の現代史』酒井啓子著、講談社現代新書、2018年
- ・ 『一神教と戦争』橋爪大三郎・中田考著、集英社新書、2018年
- ・ 『イスラエルに関する十の神話』イラン・パペ著、脇浜義明訳、
法政大学出版会、2018年
- ・ 『中東の世界史』臼杵陽著、講談社現代新書、2018年